

ヒシャゲ古墳の周庭帯と埴輪

小 栗 明 彦
東 影 悠

目 次

I. はじめに	41
II. 橿考研 1992 年度調査の成果	41
III. 周庭帯の復元	42
IV. 円筒埴輪の様相	42
V. まとめにかえて	42

論 文 要 旨

まず 1992 年度に行ったヒシャゲ古墳後円部東側内堤発掘調査の詳細を報告した。内堤平坦面葺石、内堤外側埴輪列、内堤外斜面葺石、渡土堤、外堤平坦面葺石などについて述べた。

次に現在までの発掘調査成果からヒシャゲ古墳周庭帯を復元した。内堤には平坦面、斜面ともに葺石が存在し、外側に偏って内外二重の埴輪列が設置される。無飾式蓋上載円筒埴輪、有立飾式蓋上載円筒埴輪、朝顔形埴輪が規則的に配置された可能性と、内側埴輪列の方に背高い規格の埴輪が使われた可能性がある。外堤にも平坦面、斜面ともに葺石が存在する。後円部北側では先行古墳を避けて外堤幅や外周濠底幅が狭められる。後円部北東側では内堤平坦面に器財埴輪を設置する台状施設と、外堤平坦面に何らかの施設とが存在する可能性が高い。

また内堤外側埴輪列に設置された円筒埴輪の属性がニサンザイ古墳の埴輪と共通することから、ヒシャゲ古墳の築造を 5 世紀第 3 四半期とした。ただしヒシャゲ古墳の埴輪には百舌鳥古墳群の埴輪と共通性を持ちながらも佐紀古墳群の伝統要素を引き継ぐ点も見られる。

小栗 明彦（おぐり あきひこ）

奈良県立橿原考古学研究所 指導研究員

東影 悠（ひがしかげ ゆう）

奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員

I. はじめに

29年前に小栗が担当した奈良市佐紀古墳群のヒシャゲ古墳の発掘調査（榎考研 1992 年度¹⁾）では、外周濠が後円部側にまで及ぶことが判明したほか、当時まだ不明だった築造年代を知れる埴輪が出土するなどの成果が上がった。しかし報告が概要のみに止まり、正確な調査区位置や出土埴輪などを公表できずに本日に至ってしまった。ここに深くお詫びし、東影の協力を得て概報で果たせなかった部分について報告するとともに、その後に行われた発掘調査（宮内庁 1993 年度²⁾、同 1994 年度³⁾、榎考研 1993 年度⁴⁾、同 2001 年度⁵⁾）の成果をあわせて周庭帯⁶⁾の復元と円筒埴輪について述べる。

II. 榎考研 1992 年度調査の成果

調査区位置 後円部真東の内堤平坦面から外周濠と渡土堤北斜面にかかる部分に調査区を設定した。平面図は国土座標ではなく、宮内庁平城坂上陵境界番号 52 と 53 の生け垣石列が屈曲する角を基準点にしてある（図 2）。

調査区周辺地形 宮内庁境界に沿う石敷道路の外側に建つ民家と民家の間に、内堤平坦面や外周濠、外堤平坦面、外周濠を横切る渡土堤の痕跡地形が残る（図 2）。

内堤平坦面葺石 調査区西端で検出した。切土成形された標高 78.1 m の地山直上に、拳大の円礫が敷き詰められる。外周濠側に向かうほど攪乱を受けて疎らとなるが、平坦面全てが葺石に覆われていたと推定できる（図 4）。葺石の一部を採取して持ち帰り保管している。

内堤外側埴輪列 平坦面外側縁から 2 m 内側で縁に沿って一列に立ち並ぶ円筒埴輪を 18 本分検出した。後代の抜き取りなどで 3 本分欠失する。埴輪は中心間距離 35 ～ 40 cm で口縁同士がほぼ接するよう密に設置される（図 4）。地山を上面幅 35 ～ 45 cm、深さ 15 ～ 20 cm で布掘りし、その中に 1 条目突帯が標高 78.15 m で揃うよう埴輪の底に土や礫を噛ませ高さ調整を行って設置した後、1 条目突帯以下を土で埋め固定してある（図 3）。14 は朝顔形埴輪（写真 6）であるが設置時に底部が打ち欠かれ、その破片を下敷にして 2 条目突帯が標高 78.15 m となるよう高さ調整されていた。5 の内部には無立飾式蓋埴輪上端部折返し破片（図 7）が落ち込んでいたことから、5 は無立飾式蓋を上載した円筒埴輪と見られる。

10 付近からは有立飾式蓋埴輪立飾部らしき破片（写真 8）が出土しており、10 は有立飾式蓋を上載した円筒埴輪の可能性が高い。この見立てが正しければ、無飾式蓋上載円筒埴輪、有立飾式蓋上載円筒埴輪、朝顔形埴輪がそれぞれ普通円筒埴輪 4 本を挟んだ間隔で規則的に配置されていたことになる。13 の上部は内堤外斜面裾に転落した状態で出土した（図 4 の埴輪 17、写真 5）⁷⁾。埴輪列の 2 ～ 15 は取り上げて持ち帰り保管している。

内堤外斜面葺石 裾から約 1 / 3 が残存し、それ以上は崩落していた。平坦面のそれよりもやや大きい 10 ～ 15 cm の円礫を用いる。基底石と判断できる石は見つけれなかった（図 4）。葺石の一部を取り上げて背後を掘り下げ、土層断面観察を行った結果、地山を粗く切土成形した法面上に黄褐色土を盛って整形し、更にその上に赤褐色土を敷いてから円礫を葺いたことが判明した（E-F 土層断面図）。斜面下端は標高 76.55 m であり、上端高を内堤外側埴輪列 1 条目突帯と同じ 78.15 m に復元すると、比高差 1.6 m となる。残存葺石の傾斜角 24.5 度の延長線と標高 78.15 m の交点を完成時の上端とすると、上下端間の水平距離は 3.5 m である。取り上げた葺石の一部は持ち帰り保管している。

渡土堤 切土成形された東西方向の土堤で、部分的に幅 1.9 m の後代の南北溝によって濠底まで分断されている。平坦面は土砂流出によって内堤より低くなっており、内堤平坦面から葺石が連続していたかは分らない（図 4）。北斜面の崩落土から円礫が多く出土しており（C-D 土層断面図）、斜面葺石の存在は確実である。崩落土から埴輪片の出土も多かったが、平坦面での埴輪設置の有無は分らない。斜面は内堤外斜面と同様、地山を粗く切土成形した法面に盛土整形してから円礫を葺いてある（I-J 立面図）。地山での北斜面下端標高 76.6 m、法面傾斜角 33 度であり、完成時の上端を内堤外斜面同様 78.15 m とすれば、比高差 1.55 m、斜面上下端間の水平距離 2.4 m である。法面盛土整形分の厚みを数 10 cm と見積もると、調査結果と痕跡地形（図 2）から土堤は平坦面幅約 3 m、下端幅約 8 m に復元できる。

外堤平坦面葺石と盾埴輪 調査終了半月後、渡土堤正面の外堤平坦面跡で植樹用に掘った土坑から盾埴輪片を採集した（図 2、7）。拳大の円礫も散乱していた。外堤平坦面にも葺石が存在し、埴輪も設置されたことを示す。

溝 2 内堤外斜面と渡土堤北斜面の接統角から内堤外側埴輪列を壊して南西に向かう幅 65cm、深さ 10cm の溝である (図 4)。渡土堤を分断する溝が掘られる以前に外周濠から溢れる水を内周濠に導いた溝と思われる。

Ⅲ. 周庭帯の復元

図 1 のようにヒシャゲ古墳の周庭帯を復元した。

内堤 現状の平坦面幅は東西とも括れ部から前方部にかけて幅広くなっており、その最大幅 17 m を完成時の平坦面幅と見る。外斜面は榎考研 1992 年度調査 (以下、榎 92) で幅 3.5 m、高さ 1.6 m であるが、外周濠より内周濠の方が深いと考え、内斜面幅を倍の 7 m とした。榎 92 で平坦面、斜面とも葺石の存在を確認した。

内堤二重埴輪列 宮内庁 1994 年度調査 10 トレンチ (以下、宮 94-10) で 10.5 m 幅の内外二重列を、榎 92 で平坦面外側縁より 2 m 内側に外側列を確認した。平坦面幅 17 m とした場合、内側列と平坦面内側縁の間は 4.5 m となり、外側に偏って設置したことになる。いずれも隙間無く円筒埴輪が並ぶ。榎 92 で外側列に無飾式蓋上載円筒、有立飾式蓋上載円筒、朝顔形が規則的に配置された可能性を見たが、全域で同様な渡土堤正面のみの特性かは不明である。宮 94-10 では内側列にやや大型の円筒を設置しており、内側列の方が背高い可能性がある。榎 92、宮 94-10 により埴輪は布掘りで 1 条目突帯まで埋めたと分かる。高さ調整に底部を打ち欠く例が宮 94-10、榎 92、榎 01-2 にあり、頻繁に行われている。榎 01-2,3 でも外側列が見つかったが、盛土で 1 条目突帯まで埋められていた。ここには外側列の直ぐ内側に葺石を施した盛土があり、蓋、盾、家の可能性がある埴輪片 (写真 9) も出土したことから、平坦面上に形象埴輪を設置した台状施設が存在する可能性が高い。

外堤 前方部側の現状から平坦面幅を 8 m とし、斜面幅を内堤外斜面と同じ 3.5 m とした。榎 94-A,B,D で内斜面葺石を、榎 94-D で平坦面葺石らしき石を確認した。榎 92 外堤平坦面跡植樹時の円礫散乱も平坦面葺石の肯定要素である。後円部北側では陪冢は号がヒシャゲ古墳に先行するようで、それを避けて外堤幅や外周濠底幅が狭くなることが榎 94 で判明した。榎 01-3,5 で平坦面外側縁を示すような比高差 30cm の切土段差が見つかったが、後円部円弧に沿わず平坦面の範囲が外側に広がって

おり、付近に何らかの施設が存在する可能性が高い。

外堤埴輪列 榎 92 植樹時に渡土堤正面平坦面で盾が、宮 93、宮 94-17 で平坦面から円筒などが出土しており、器財埴輪を含んだ埴輪列が存在したと見て良い。

Ⅳ. 円筒埴輪の様相

榎 92 の内堤外側埴輪列出土品が良好資料である (図 5～7、表 1、写真 1～8)。円筒は 7 条突帯 8 段構成で、底部高と胴部突帯間隔が等しく、口縁部高が短い。底径は 24～27cm、底部高は 9～10.5cm で平均 9.8cm、突帯間隔は 9～11cm で平均 9.9cm、口径は 30.5cm、口縁部高は単純口縁のもので 6.1cm、口縁端に突帯を作るもので 7.1cm を測る。突帯剥落部分に現れる突帯間隔設定痕には凹線と沈線がある。円形透孔一対を 3、4、6 段目に交互方向に穿つ。外面 1 次調整はナデもあるが縦ハケが大半である。2 次調整横ハケは底部には半数程、2 段目以上には全て施し、工具静止痕が付く場合は Bb・Bc 種併用が 3 個、Bc 種が 2 個、Bd 種が 2 個あり、Bc 種の率が高い。横ハケ工具幅は 70～74mm である。内面調整は縦ハケもあるが左傾ナデが大半である。基部内面に横ナデまたは縦オサエの調整を加えることが多い。

宮 93、宮 94 の内外堤出土品も基本的に同じ様相であるが、内堤の宮 94-10,15 では方形透孔も見られる。宮 94-10 の内堤内側埴輪列の円筒は底径 31cm、底部高 12cm、胴部突帯間隔 12cm、口縁部高 12cm に復元でき、内堤外側及び外堤の円筒埴輪に比べやや大型品である。

Ⅴ. まとめにかえて

ヒシャゲ古墳は、内堤外側埴輪列の円筒埴輪が 7 条突帯 8 段構成で、突帯間隔 10cm 前後、外面 2 次調整横ハケが Bc 種中心に Bb 種、Bd 種が一定量見られるなどの点で大阪府堺市ニサンザイ古墳の埴輪と共通し、同じ 5 世紀第 3 四半期の築造⁸⁾ と言える。ただし円筒埴輪口縁部高はニサンザイ古墳では突帯間隔と揃うが、ヒシャゲ古墳では基本的に短い。前時期に口縁部高が短く、突帯間隔に大小の規格がある奈良市ウワナベ古墳の円筒埴輪⁹⁾ が存在する点を考えると、百舌鳥古墳群と共通性を持ちながら佐紀古墳群の伝統要素も引き継ぐ様子が窺える。なお内堤平坦面葺石の類例は現状で大阪府堺市大仙古墳のみ¹⁰⁾ である。

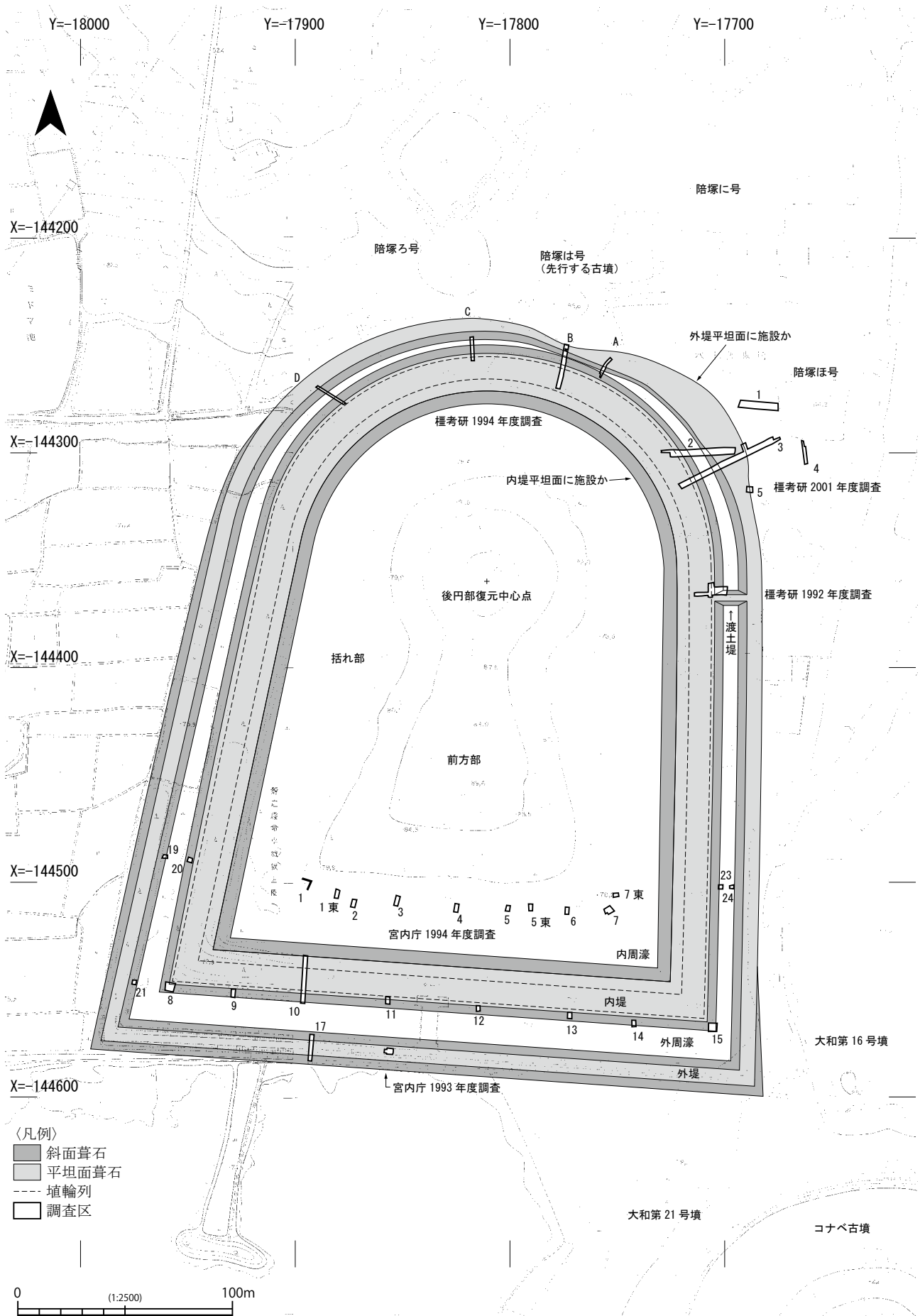


図 1 ヒシャゲ古墳発掘調査区位置及び周庭帯復元図 ※座標は日本測地系

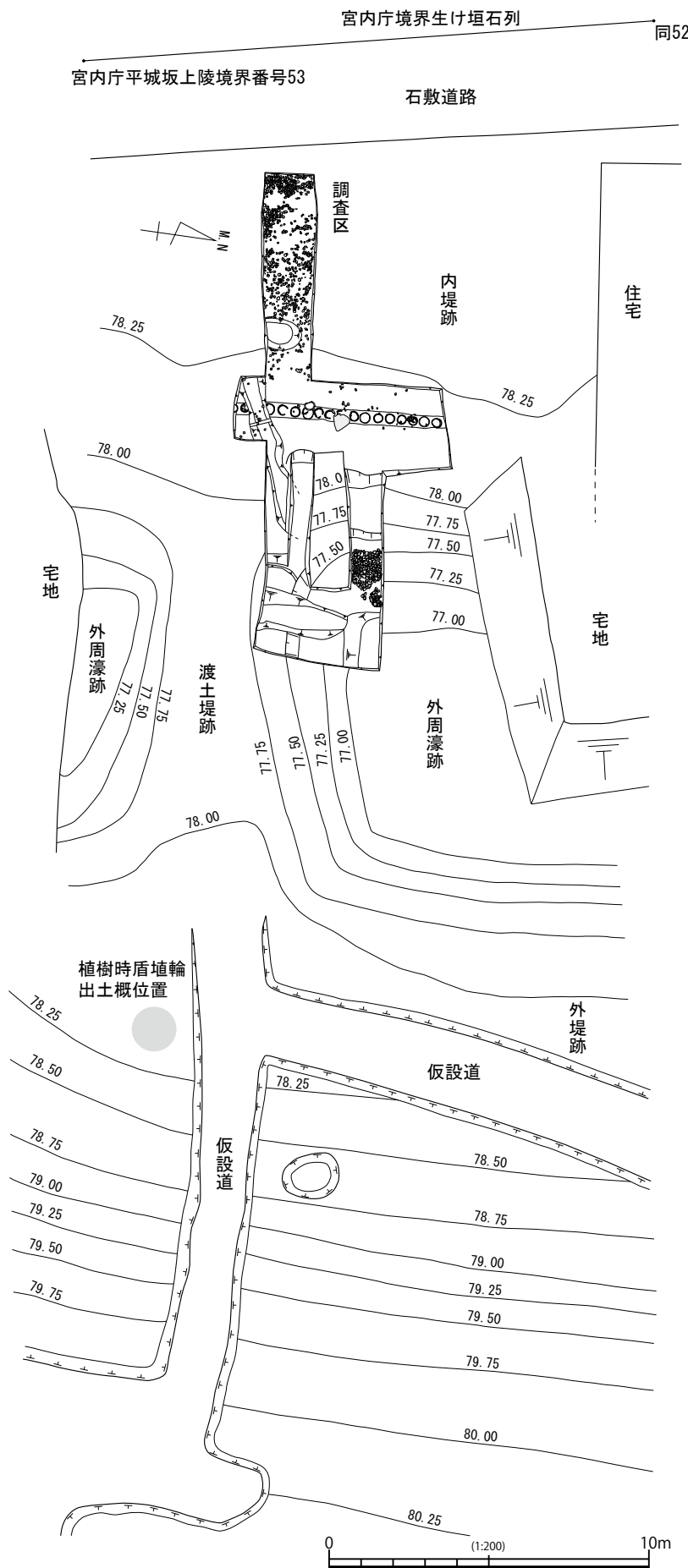


図2 榎考研1992年度調査区周辺地形測量図

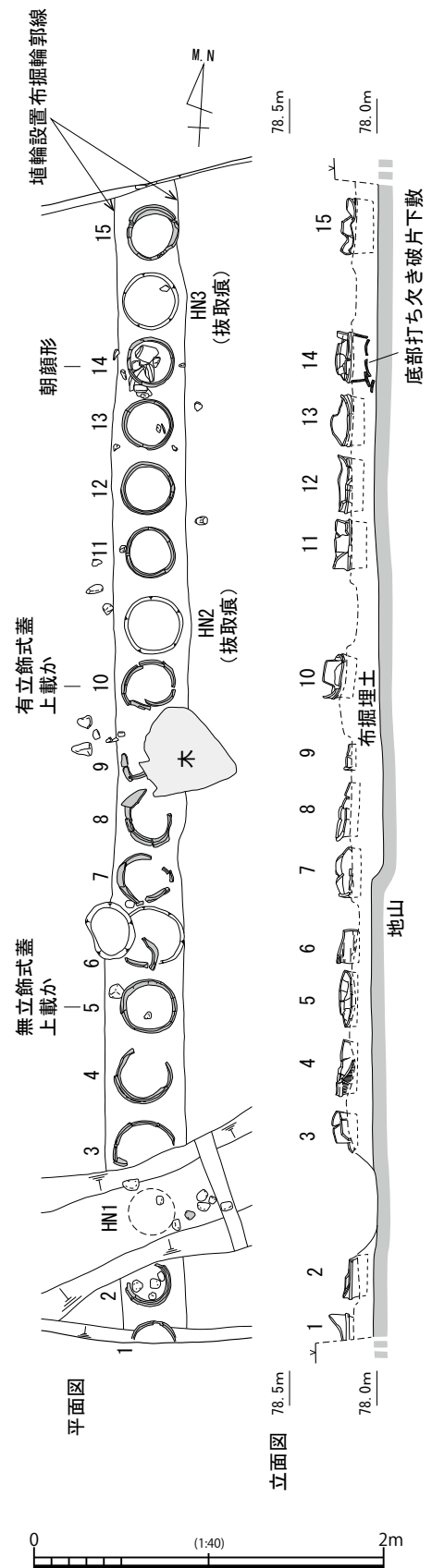


図3 榎考研1992年度調査内堤外側埴輪列
平面・立面図

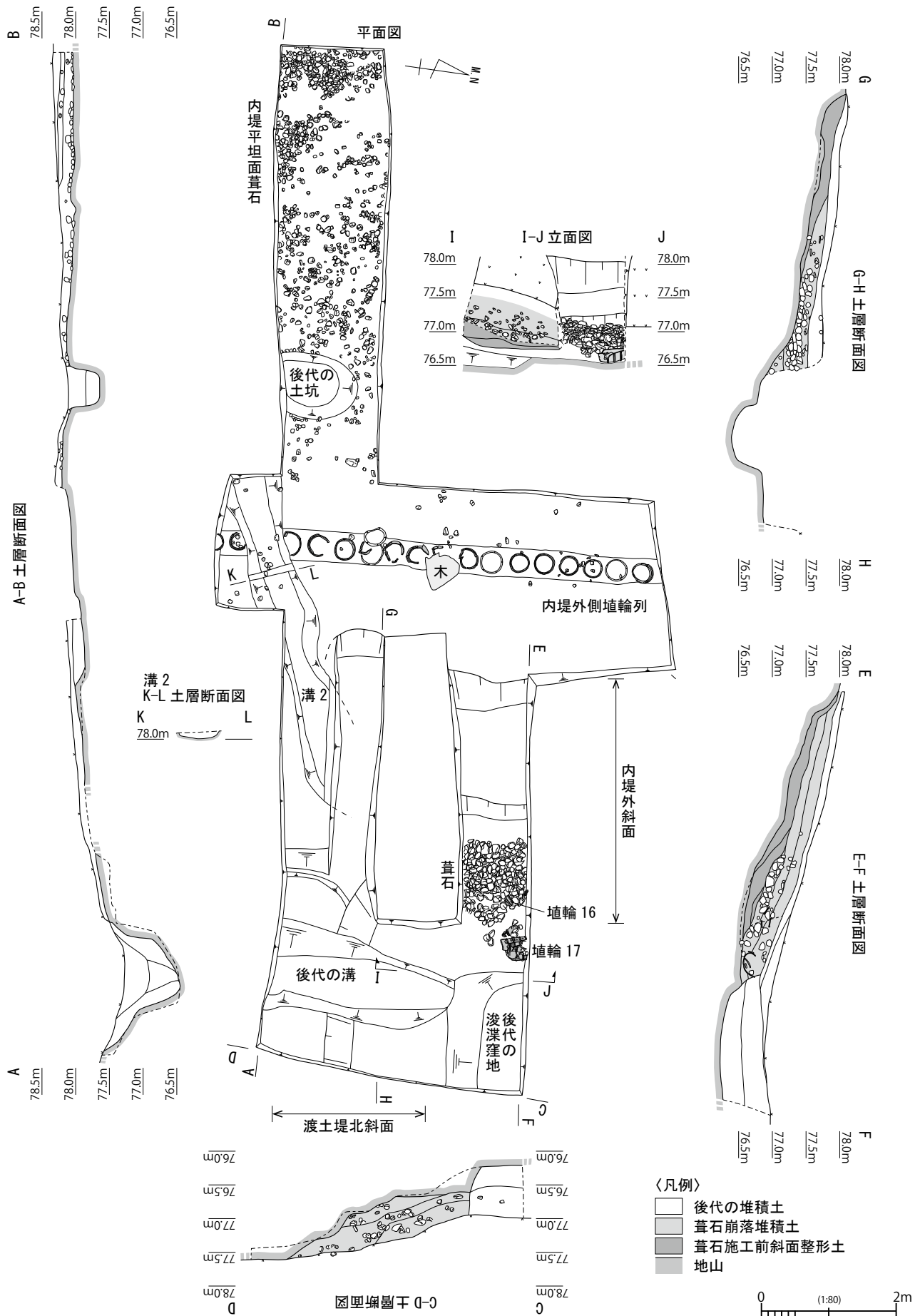


図4 榎考研 1992 年度調査区平面・断面・立面図

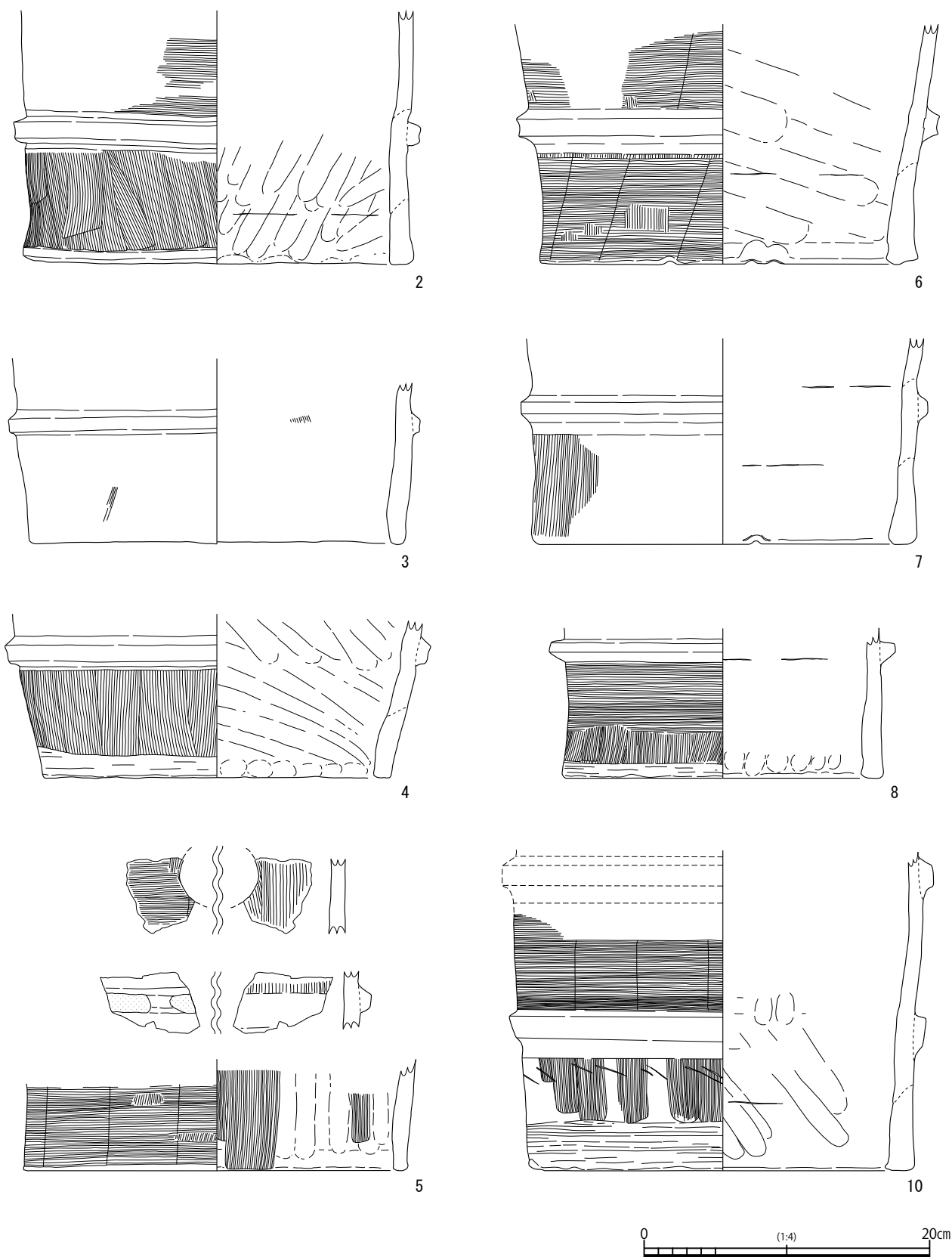


図5 榎考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪実測図 (1) ※番号は図3 と対応

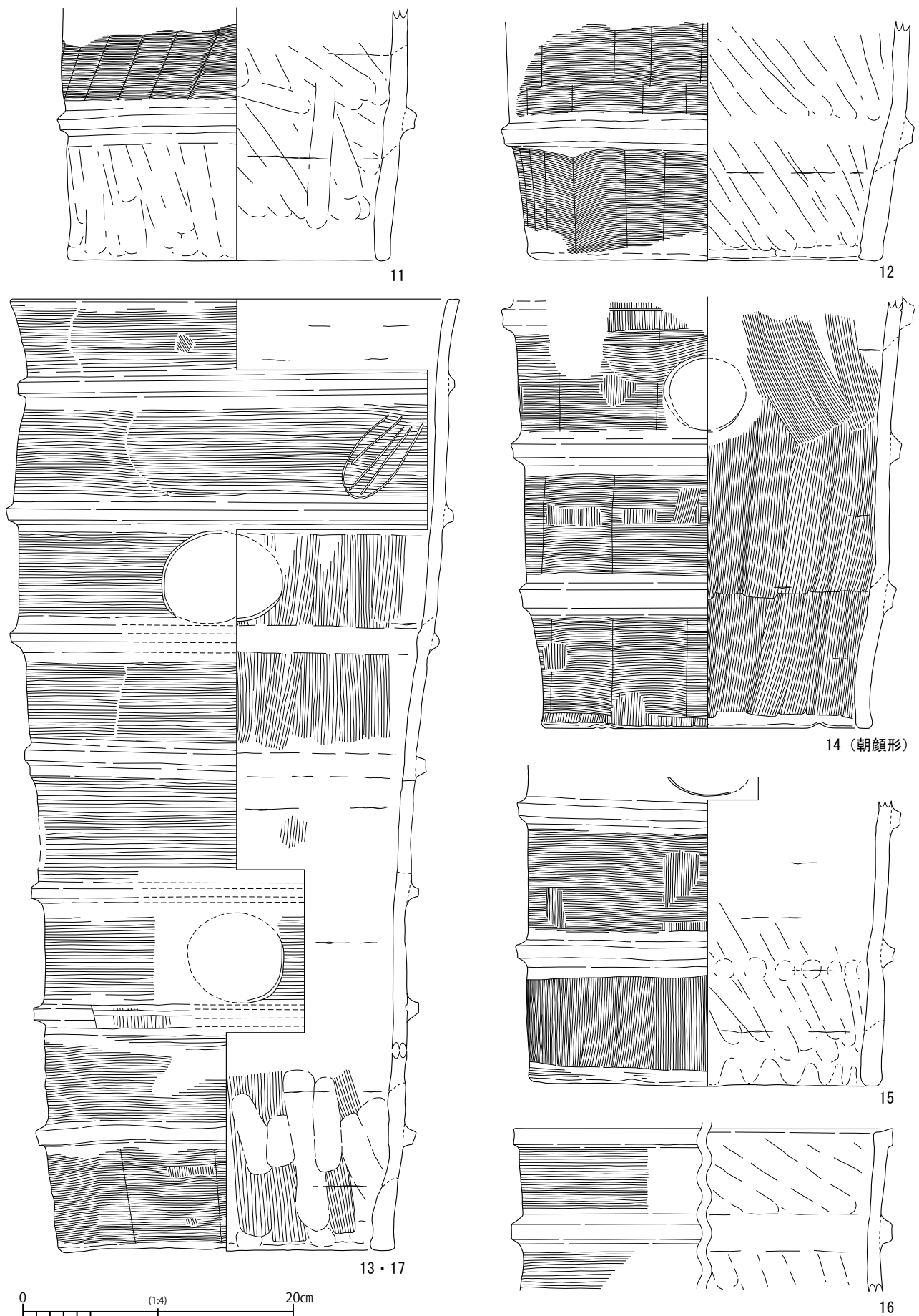


図6 榎考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪実測図 (2) ※番号は図3・4 と対応

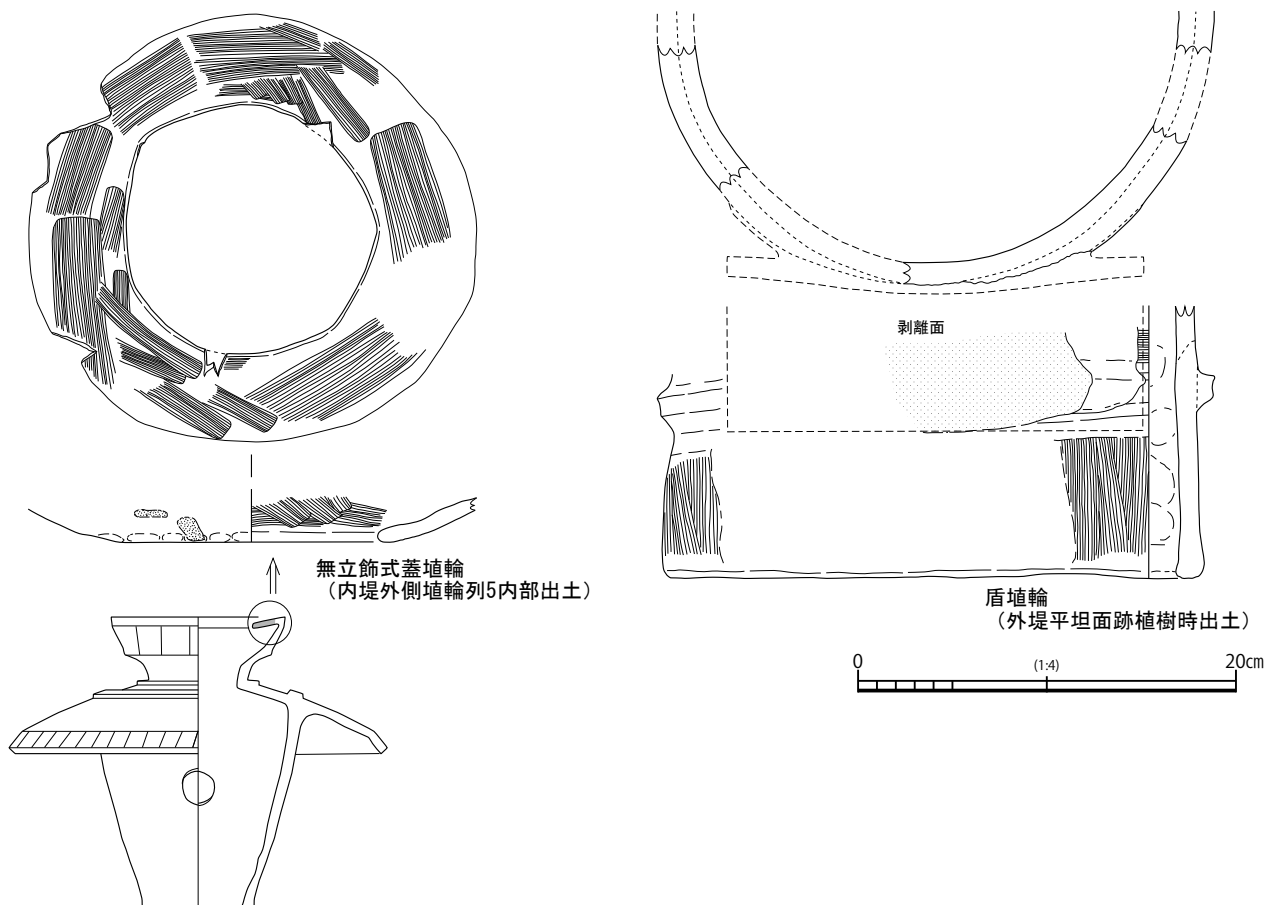


図7 榎考研1992年度調査出土器財埴輪実測図 ※出土位置は図2・3を参照

表1 榎考研1992年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪観察表 ※〔 〕内の数値は復元推定値

番号	計測値（mm）						外面調整			内面調整	基部特徴		備考	
	下端径			高さ			1次	2次横ハケ			外面	内面		
	底部	2段	3段	底部	2段	3段		底部	2段					3段
2	[273]	[270]		97	>80		縦ハケ	無	有		右傾ナデ	工具擦痕	無	
3	[262]	[277]		87										
4	[249]	[286]		94			縦ハケ	無			左傾ナデ	工具擦痕	縦オサエ	
5	268						縦ハケ	Bc		Bb	縦ナデ・ハケ		横ナデ	円形透孔破片有り
6	[265]	[280]		102	>65		縦ハケ	Bd	Bd		左傾ナデ		横ナデ	横ハケ工具幅 74 mm、突帯間隔設定凹線
7	[270]	[270]		98			縦ハケ							
8	[242]	[240]		95			縦ハケ	有				工具擦痕	縦オサエ	
9							縦ハケ							
10	264	276		103	106		縦ハケ	無	Bc		左傾ナデ	工具擦痕	無	押圧技法突帯、底部外面に押圧板痕
11	240	252		106	>80		左傾ナデ	無	Bd		左傾ナデ			
12	264	285		98	>80		ナデ	Bc	Bb		左傾ナデ		横ナデ	横ハケ工具幅 71 mm
14	243	257	266	103	108	100	縦ハケ	Bc	Bc	Bb	縦ハケ			朝顔形、突帯間隔設定沈線
15	269	269	[276]	103	102		縦ハケ	無	有		左傾ナデ	工具擦痕	縦オサエ	横ハケ工具幅 71 mm
13・17	252	265	[268]	91	>87	93	縦ハケ	Bc	有	有	左傾ナデ・縦ハケ		縦オサエ	横ハケ工具幅 70 mm、7段目にヘラ記号口径 [341] mm
	4段	5段	6段	4段	5段	6段		4段	5段	6段				
	[274]	[281]	[293]	99	93	92		有	有	有				
	7段	口縁		7段	口縁			7段	口縁					
	[298]	306		94	61			有	有					
16				>48	71			有	有		左傾ナデ			



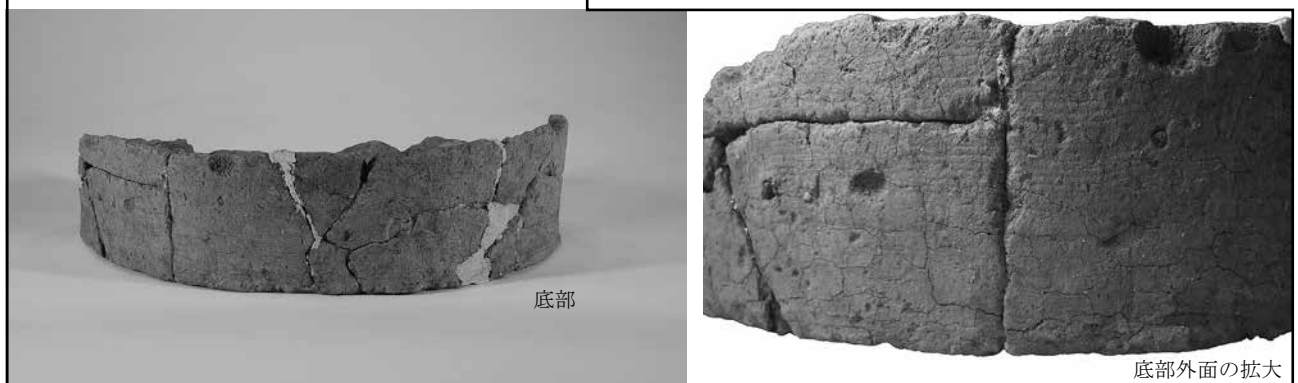
2



3

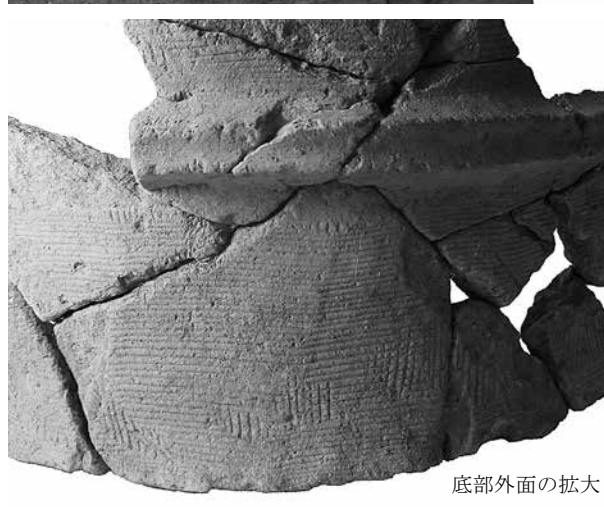


4



5

写真1 榎考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪 (1) ※番号は図 3・5 と対応



6



7



8

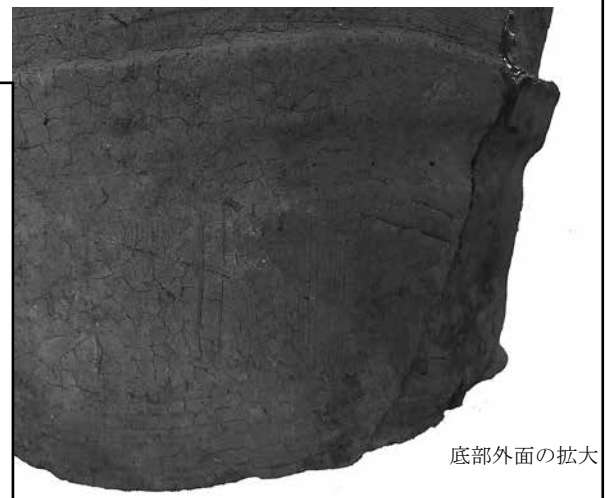


9

写真2 榎考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪 (2) ※番号は図3・5 と対応



2 段目外面の拡大



底部外面の拡大

10



2 段目外面の拡大

11

写真 3 榎考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪 (3) ※番号は図 3・5・6 と対応



写真4 榎考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪 (4) ※番号は図 3・6 と対応

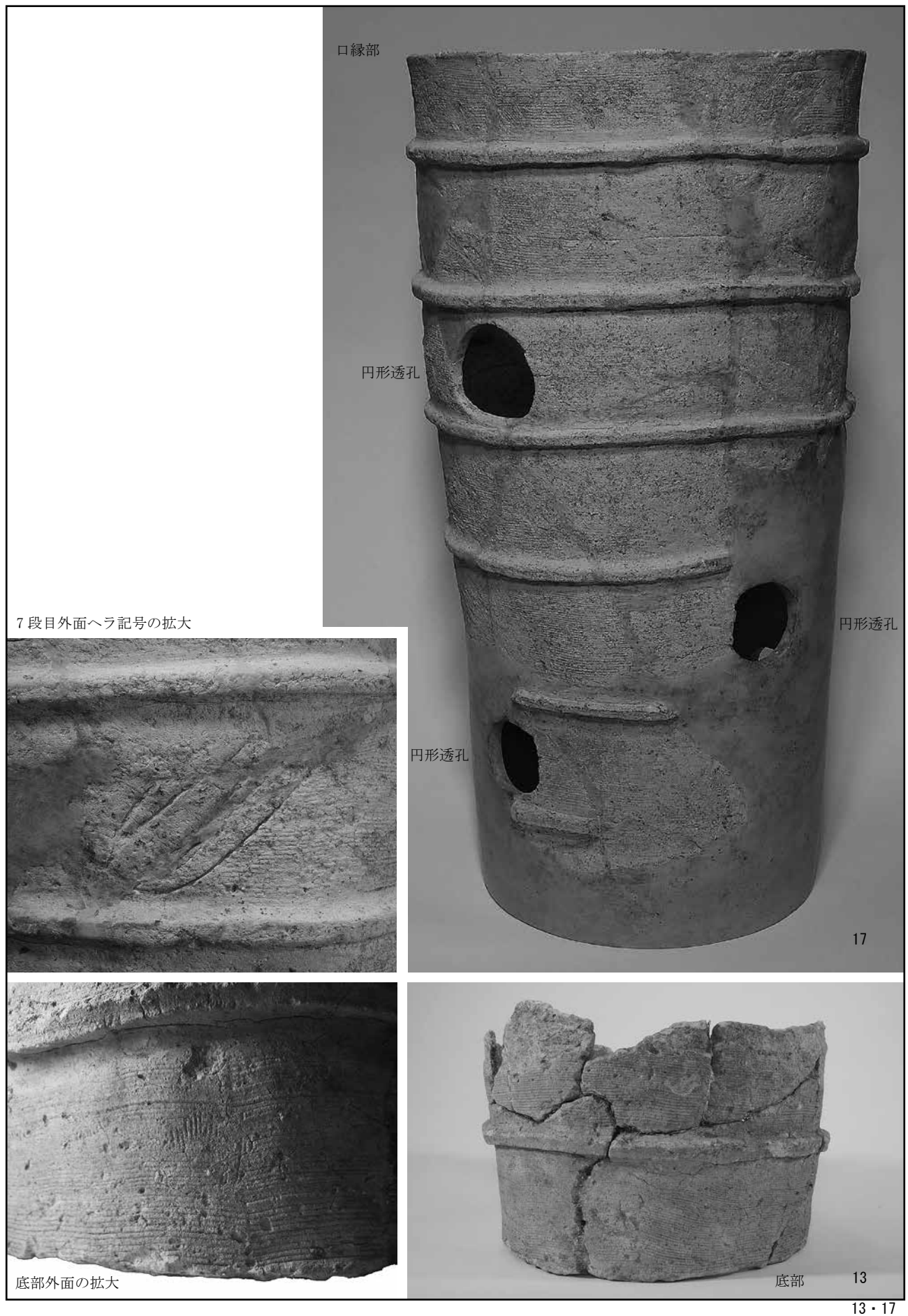
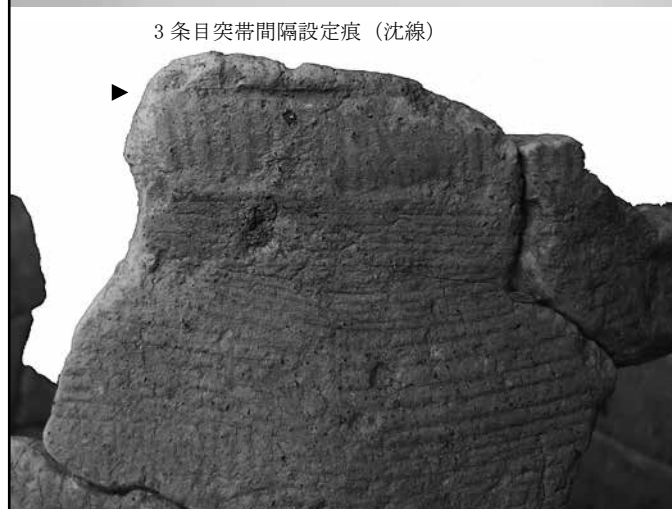


写真5 橿考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪 (5) ※番号は図 4・6 と対応



14（朝顔形）



15



16

写真6 樫考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪（6） ※番号は図3・4・6 と対応



写真7 榎考研 1992 年度調査内堤外側埴輪列出土円筒埴輪 (7) ※番号は図3 と対応

HN1

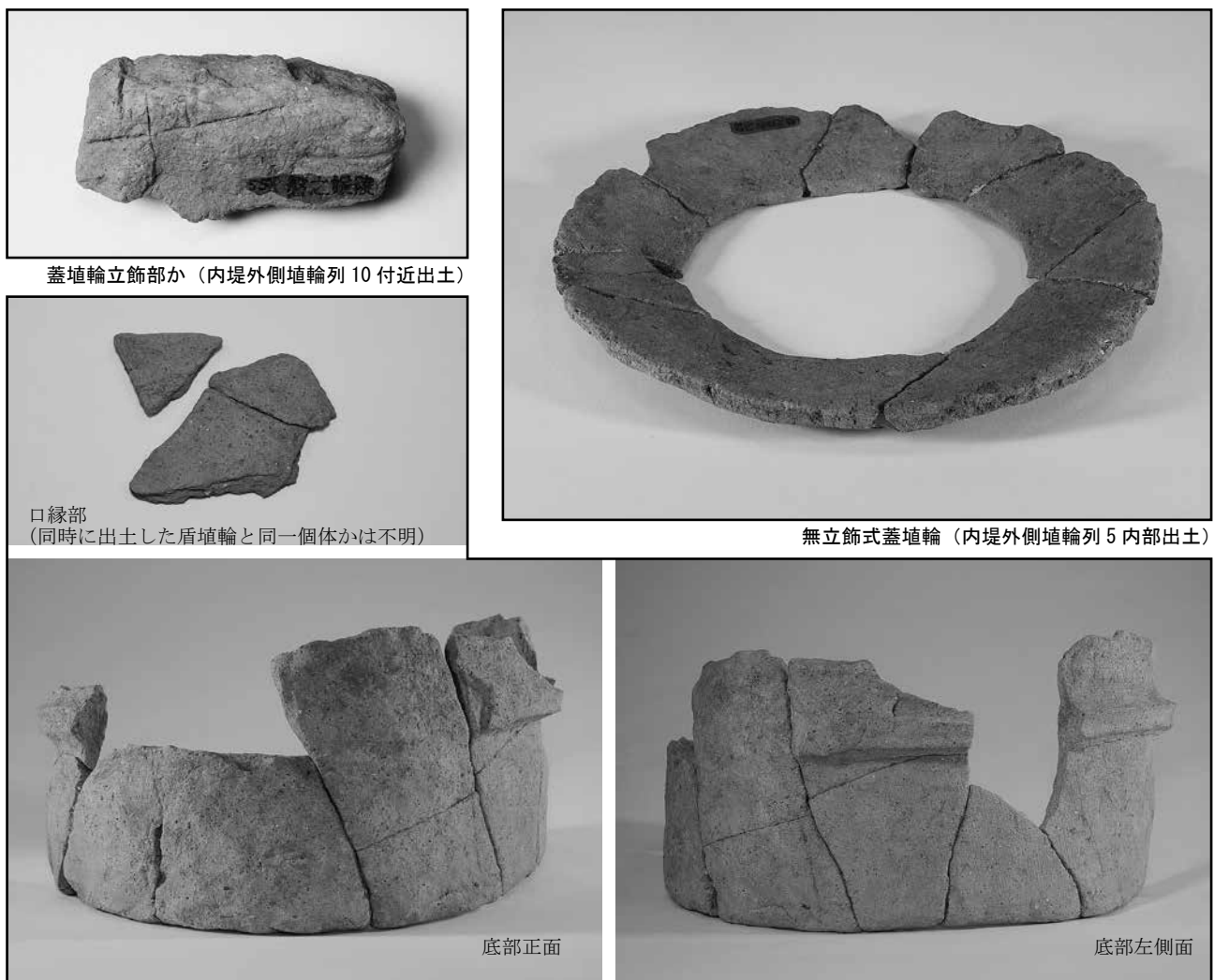


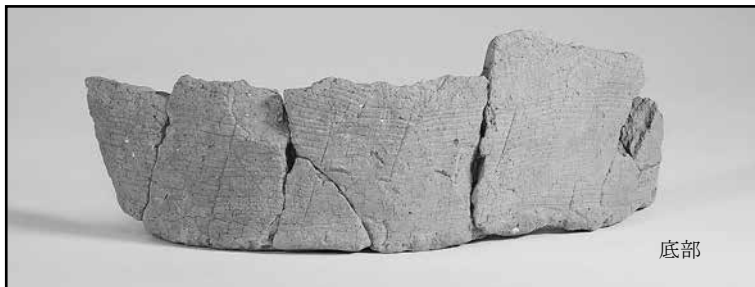
写真8 榎考研 1992 年度調査出土器財埴輪 ※出土位置は図2・3を参照

盾埴輪（外堤平坦面跡植樹時出土）



底部

円筒埴輪（内堤外側埴輪列出土）



底部

円筒埴輪（内堤外側埴輪列出土）



蓋埴輪笠部か（外周濠出土）



盾埴輪か（内堤外側埴輪列付近出土）



家埴輪か（外周濠出土）

写真9 榎考研 2001 年度調査 3 トレンチ出土埴輪

註

- 1) 奈良県立榎原考古学研究所 1993「日葉酢媛陵古墳隣接地 1 次 日葉酢媛陵古墳隣接地 2 次 磐之媛陵古墳内堤発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1992 年度（第 1 分冊）』
- 2) 宮内庁書陵部 1995「平城坂上陵見張所改築区域の調査」『書陵部紀要』第 46 号
- 3) 宮内庁書陵部 1996「平城坂上陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第 47 号
- 4) 奈良県立榎原考古学研究所 1994「磐之媛陵古墳後円部外濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1993 年度（第 1 分冊）』
- 5) 奈良県立榎原考古学研究所 2002「佐紀ヒシアゲ古墳第 4 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 2001 年度（第 1 分冊）』
- 6) 「周庭帯」という用語を、古墳として造成された範囲のうち墳丘を除く部分という意味で用いる。

- 7) 13 と 17 は木村理氏の協力で双方のハケメが同工具によるものと判明した。接合はしないが、他の特徴も似ることから同一個体と判断できる。また註 1) 文献では 17 が埴輪転用棺である可能性も記したが、調査写真等を再検討した結果、その可能性はほぼ無いと考えるに至った。
- 8) 宮内庁書陵部 2014「東百舌鳥陵墓参考地整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第 65 号、堺市教育委員会 2018『百舌鳥古墳群の調査 11 ニサンザイ古墳』
- 9) 奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告 VI』
- 10) 宮内庁書陵部 2020「仁徳天皇百舌鳥耳原中陵第 1 堤における遺構・遺物確認のための事前調査」『書陵部紀要』第 71 号

付 言

埴輪実測には米井友美、写真撮影には垣内喜久子、製図には宮田稔子、土居紀子の協力を得た。本稿は科研費 JSPS20H01363 の助成による成果の一部を含む。